

「百年来の経済危機」が齎(もたら)すか、新「人間像」

森 一久

筆者は先の「ブログ開設の弁」の中で、「今回の危機が收拾された後の経済・社会の姿は、従前のものとは全く変わったものになるに違いない」と述べた。しかし今、各国が一斉に発動している施策は、公的資金や法的措置による「力ずくの」需要押上げと、いわゆる「弱者」に対するセイフティー・ネットの構築とに尽きるといっても過言ではない。つまり、このような手段で経済の「温度」を保っておけば、そのうちに何とか経済の「血」や「歯車」が、レベルはともかくとして、以前通りの仕組みで回り始めるものと、世界の施政者たちは思い込んでいる、或いは自己暗示に掛けている、ように見える。(或る国では、指導者が「全治3年」とか「追っかけて増税を」と言っている、これは「柳の下の鮎」派の超原理主義者みたいで、全く論外だが…)

その上日本では、丁度総選挙間近かとあって、政権与党はスポンサーの歓心を買いたく、打つ手は一層場当たりのになり勝ちである。経営者はそのほとんどすべてが、緊急避難的な縮み思考であるだけに、それに迎合する政策に将来構想を期待するほうが無理というものであろう。(新投資への全額免税を要求する経営者の一人位出てもよさそうなものだが…)野党とは言えば、セーフティ・ネットの強化は「当然」としながらも、思いつきや怪しげなバラマキにも、真面目に反対しようものなら、与党から景気回復の「邪魔者呼ばわり」されかねず、つぎの選挙の損得を計りかねて、歯切れが悪い。

さて、経済社会とは、向こう三軒・両隣から、地域、国、経済圏、そしてその間の力関係まで、多種多様かつ多層であるが、其れを構成しているのは、必ず「人間」である。そして経済社会を動かしているのはその(人間達の)価値観・意欲、平たく言えば「気持」である。もっと言えば、「気持が変われば」世の中は変わる。私流に言えば、DNAのOn/Off状況が変われば世の中は変わる、のである。—— * 拙稿3/9掲載参照。

もともと今回の混乱状況の引き金でもありまた結果であるのは、すべての階層の人(乃至その集団)の心の中に生じた、各種各様の「疑心暗鬼」とその「あがき」である。大は金融機関の貸し剥がしから派遣切り、宿舍追放、小は庶民の政治・政府不信と自己防衛である。

筆者の乏しい経験と見聞からみてこう思う。世界最大の自動車メーカーが一夜にして大赤字に転落し、躊躇いも無く、首切り・減産・工場閉鎖に奔る様を目の辺りにして、日本人は、既に「高価な車」志向が、自動車立国などというキャッチフレーズ作られた虚構であったことなどに既に気付いている。この辺りから、人間が変わり、「山が動く」可能性を期待しては、楽観的過ぎるであろうか。… (つづく)